

---

# 毒舌博士のとある自論～生と死～

松本ジョウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

毒舌博士のとある自論〜生と死〜

### 【Nコード】

N8994X

### 【作者名】

松本ジョウ

### 【あらすじ】

とにかく、自論を展開していくだけ。どこまで読んで、どれだけ共感するかはあなた次第。

## はじまりはじまり

わたし、アスカ。ちょっと前に引越してきたんだけど、最近のわたしの一日は、とある憎たらしい毒舌博士の自論を聞くことが軸になってきてる。わたしの住む住宅街からほんの少し離れた荒地に、ポツンと建つ馬鹿でかい屋敷。一見すると幽霊屋敷だけど、住んでいる女博士は幽霊より偏屈なんだ。たまたま好奇心で屋敷に入り込んで、博士に見つかって、自論を聞かされて以来の付き合い。今日も、わたしはあの屋敷へ行く。博士に会いにじゃなくって、話を聞きに。

屋敷には、普通に入る。鍵なんてかかっていたためしがない。もつとも、誰もこんなぼろつちい家、狙わないだろうけど。大きな扉を開けて中に入り、一言博士を呼ぶ。そうすれば、博士は至極面倒くさそうに現れるのだ。

「あ、来たの。随分とまあ、気楽に人んち訪ねるもんだね。」  
「いちいち、言い方にカチンとくる。ムツとした顔をすれば、博士は鼻で笑って踵をかえた。愛想の力ケラもないことなんていつものことだし、何を言っただって口で勝てたためしなんてないから、そのまま博士の後を追う。」

「もう少しさ、歓迎の態度示してくれたっていいじゃん。」  
私がそう言つと、博士はくるりと振り返って腰をかめる。羽織っている薄汚れた白衣がふわりと舞う、軽い振り返り方。博士の癖だ。  
「それは心外だね。そもそも私は、キミを招いた覚えなんてないのだけれど？」

「……そりゃそうだけどさ。」  
「キミは、いきなり見知らぬ人が家に上がりこんできて歓迎しろなんて言われたら、はたして歓迎しようなどと思えるのかい？」  
「それとこれとはちが、違わないね。」

ほら、私の話なんて、最後まで聞きやしない。

「キミの言っていることはまさにそのことさ。……ま、キミの場合見知らぬ人ってわけじゃないのが多少なりと違うだけでもね。一方的な好意に、同等のお返しなんてする必要はないさ。」

「博士の自論ってわけ？」

私のセリフに、博士の口はにんまりと三日月形の弧を描いた。

「そう、自論。」

自論。こうやって、博士はいくつもの自論を持っている。博士いわく、世の中の常識なんてものは個々の自論が世間一般に広まったものであり、先に広まった自論が常識になるんだとか。これも結局は博士の自論に過ぎないんだけど、どこか納得させられるものがある。そりゃあ半分以上は屁理屈だと思うんだけどね。私は毎日、ここに来て博士の自論を聞いているのだ。

「でもその自論、言っちゃえば屁理屈でしょ？」

「どう思ってもらおうが一向に構わないよ。私はキミに、私の自論を飲み込むことなんて強要してないからね。それに、私はいつもキミが帰るとき話しているはずだけど？」

再び博士の口が、三日月形の弧を描く。そう、こんな笑みを浮かべたとき、博士は自論を展開するのだ。

「またねとは言わないよ……ってね。そこにはふたつの選択肢しか残されていない。」

博士の細くて白い指が、ゆっくりと曲げられる。このとき私は、一種の催眠術にかかったかのような不思議な感覚に囚われるのだ。

「ひとつは、ここに来ないこと。もうひとつは、ここに来ること。」

「また来てね」なんて言っていないのだから、キミにはここに来なければならぬ理由などない。しかし、「もう来るな」とも言っていないのだから、キミにはここに来てはならない理由もない。キミにはこのふたつの選択肢が残っているわけだ。どちらをチョイスしてもらっても一向に構わないよ。」

博士はいつもそう。こちらには一方的に選択肢を与えるだけで、

博士自身はそれ以上深入りしてこない。そうして選択肢の前に悩み迷う人をじっくりと観察し、ひとり楽しんでいるのだ。悪趣味にもほどがある。

「そんなこと言うなら、私がここに来たって、面倒だったら追い返せばいいじゃない。」

「ああ、追いつ返してもいいのかい？ 私なりにキミに対して必要最低限の敬意を払っていたつもりなのだけれど。キミがそれでいいというのなら、丁重にお引取り願おうかな？」

「何それ、ひっど〜い！」

「おやおや、キミが自分から言い出したことじゃないか。もちろん、今までの住居不法侵入についてもいろいろ話さなくちゃならないだろうけれどもね。」

博士は至極楽しそうに私の反応を見ている。落ち着け私、ここで変に憤慨しては向こうの思う壺だ。

「……どうもすいませんでした。」

「分かればよろしい。」

博士はしれっとそう言って再び歩き始めた。憎たらしい〜！ いか絶対に参加しましたと言わせてやる！

「今日は、どんな自論？」

私がそうつつけんどん聞くと、博士はいつもの肘掛け椅子に座り、つまらなさそうに

「キミ、死にたいと思ったことある？」

とトンデモナイことを聞いてきた。思わず声を荒げようとしたけど、博士にあっさりと阻止されてしまう。質問に質問で返した上にこの態度、ホントに頭にきちゃう。

「あー、別に答えなくていいよ。キミが死にたくなるほど絶望してるかなんてさらさら興味ないからね。ああでも、どの程度の絶望が人に死を思わせるのかは気になるけど。……今日の自論は、生と死についてってとこかな。キミも一度は考えたことあるでしょ？ 天国や地獄はあるのかとか、人は死んだらどうなるのかとか、死ぬ瞬間

はどういうふうなかつてさ。」

「少しなら……。」

「あっそ、少しだけ？ 私なんか、実際に人を殺したらどういう心境に陥るのかってとこまで考えたことあるけど……。つまんないの。」  
「アンタが異常なだけでしょ……。！！」

こうして、とある毒舌博士による自論の展開が始まった。

## 死ぬこと

「それじゃあ、まずは死ぬことから話そうか。」

”それじゃあ、まずは部屋の掃除からはじめようか”くらいのノリでこんなトンデモナイことを話し出すあたり、やっぱりこの人は変人なんだと思い知らされる。

「キミは、死ぬってどういうことだと思う？」

「……人生が終わること？」

私の当たり障りのない答えに、博士はふーんとだけ言って頬杖をついた。

「宗教的観点から見ると、いろいろあるんだよね。例えば、永遠に続く輪廻の区切りのひとつ。これはタイかどつかの仏教的思想じゃなかったかな。善行を積みめばよりよい生物へと来世に生まれ変わることができるとあたり、日本の仏教に通じるものはあるね。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8994x/>

---

毒舌博士のとある自論～生と死～

2011年12月25日22時47分発行